外国の文献から

『心情と知性の教育
―日本の就学前と小学校教育に関する考察』

第一章　日本の教育制度

渋川　明日香

今月号から『Educating Hearts and Minds — Reflections on Japanese Preschool and Elementary Education』（一九九五）という本を九回にわたって紹介します。

この本は、キャサリン・ルイスというアメリカの研究者が過去十四年間に五十以上の日本の幼稚園・小学校を訪れ、それぞれについて一日～四か月間行った観察と九十名以上の

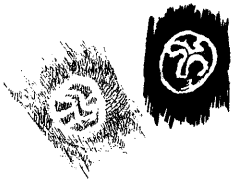
教師や園長・校長に行ったインタビューに基づいて書かれたものである。

アメリカでは、日本の子どもは学力が高いことが知られているが、その理由がどこにあるのかはほとんど知られていない。学業期間が長いのか？　国の作ったカリキュラムの効果なのか？　家族が教育に関して大きな支援をしているのか？　様々な憶測がある中で、本書では違う立場での説明を探っている。

彼女は、高校時代に交換留学生として日本の高校で学び、そこで多くの驚くべき体験をした。予想していた激しい競争社会とは裏腹に、友情に厚く、目的を分かち合う生活だったこと。先生が権威的にコントロールするのだろうと思っていたら、生徒が学校生活の多くの側面を運営していたこと。自分だけが物を奪うのでなく、お互いに分け合う感覚や大人がいなくても自分たちだけで真剣に話し合ったり学んだりすることなどの多くの謎が残り、その謎を解こうとしていく中で、彼女は日本の就学前と小学校教育に注目せずにはいられない手がかりを見いだした。就学前と小学校教育に、日本の教育が成功している鍵とアメリカ合衆国での日本の教育に関する誤解の鍵があると信じるようになったそうである。

そのため本書では日本の幼稚園と小学校低学年の教育に焦点を当て、ルイス女史自身の観察とインタビューに基づいて、できるだけ生き生きとその教室を描こうとしている。インタビューにおいて教師から繰り返し言われたことは、学校が子どもの丸ごとのニーズ（友情・所属感・自分が貢献できること）に合ったとき、子どもたちは学校への情緒的な

絆を強めるということだった。そのときに子どもたちは学校を心から一番興味のある場所と見なすようになり、学習に対して一生懸命になり、他の人に対して心づかいをするようになり、そして学習や自分の行動に対して自己批判的に反省するようになるということだった。アメリカの教師にとっても、友情や所属感を促すことは子どもの成長の中心的な課題である。うまく機能している学校では、他人に対する心づかいや支援的な関係も大切にされている。しかしアメリカのシステムでは、カリキュラムやテストやグループ編成などが、全体としてこれらの目標に合うように作られていない。実際に緊密で心づかいをしあえる関係を学校生活の中心に捉えようと志す教師は、手ごわい障壁に立ちふさがれることが多いのだという。アメリカの就学前そして小学校教育のゴールを一体どこに置くべきなのだろうか。このような問題に関して、日本の教育は貴重な視点を与えてくれる。日本の教育が成功している理由は、幼いときから友情や所属感や学校生活の創造に貢献することなどの子どもたちのニーズに合致しているからである。このような立場に立って本書は書かれている。



本書の内容は具体的には、一九七九年から一九九三年の間（一九七九年・一九八七年・一九八九年・一九九〇年・一九九三年）の観察とインタビューに基づいて書かれている。

幼稚園の観察は主として一九七九年になされ、その大半が東京および近郊の十五園（私立六園・公立七園・国立二園）である。それ以降は小学校の観察が中心になっている。十五年以上前の観察が中心になっていることもあり、現在と異なる点もあるかもしれない。しかし私たちにとっては当たり前のことが、日本の外から見るととても不思議に映るということが、逆におもしろい視点を提供してくれるため、本誌で紹介することにした。紙面の都合上、全てを訳せないため多少の分かりにくさがあるかもしれない点はご了承いただきたい。

（田代　和美）

日本の就学前教育

日本の子どもの九十パーセント以上は就学前に少なくとも二年間の教育を受ける。日本の教育の中では就学前教育が最も多様で活気があるとも言われている。就学前教育には、働いている親のニーズに合わせた全日制の保育センター（保育園）と半日制のプリスクール（幼稚園）の二つがある。しかし幼稚園と保育園は大変似ており、カリキュラムと教授方法は基本的に同じである。ただ、保育園の方が長時間で、年齢混合のグループ編成をしているところが多い。「保育園は幼稚園にお昼寝とおやつを足したもの」と、ある日本人の母親は説明した。幼稚園・保育園ともに、私立

と公立があり、選択肢が多い。教育哲学も多様である。モンテッソーリ、デューイ、フレーベルによるものや、早期音楽教育、裸での外遊びなどを強調する日本的なものもある。

アメリカ人にとって、日本の教師一人あたりの子どもの数の多さは驚きである。日本の幼稚園教師は、アメリカの小規模なクラスでの「母親のような」教師の役割をうらやましく思っている。しかし日本の就学前教育では、子どもの人数が多いため大人の権威の力を弱め、子ども同士の関係を築こうとしている。

日本では政府の規制によって、全ての幼稚園・保育園の基本的な施設が共通で比較的高いレベルになっている。また、多くの地方公共団体が就学前教育に助成金を支給しているのに加えて、国が公立だけでなく私立の施設をも助成しているということは驚くべきことである。

五歳児の教育は日本では就学前であるが、アメリカでは基本的に小学校教育の一部である。そのため、勉強面での技能を伸ばさなければならないというプレッシャーは日本よりもアメリカでの方が強いだろう。

日本の初等教育

ウィリアム・カミングズは、日本の教育の中で小学校が最高の施設であると主張する。日本はアメリカに比べて初等教育に多く投資しており、逆に大学教育への投資は少ない。百年以上の間、日本の政治家は初等教育が国の発展にとって非常に重要であると考えてきた。

日本の小学生のうち九十九パーセントは地元の公立小学校に通っている。アメリカの学校と同様

に、日本の小学校は児童の家族の職業、学校の伝統・設備など多くの点で一つ一つ異なっている。しかし日本の学校の多様性を減らす要因がいくつかある。第一の要因は、文部省が国の教育目標や授業時間数を規定し、教科書を検定し、教育政策の多くの面を強く形作っていることである。すべての小学生が、類似した教科書を使い、ほぼ同じ時間数同じ教科を勉強する。第二に、国が助成金を支給し施設や教師の数などの地域差をなくしている。第三に、日本の教師は様々な学校に転任する。つまり教師は様々な背景を持つ生徒を教えるということである。また、小学校の教師は同じ学年を何年も繰り返し教えるということはない。アメリカの教師はある特定の学年を教えて専門技術を磨くことがよくあるが、日本の学校はそれとは逆に教師―子どもの関係の安定性を重視し、通常同じクラスを二年間受け持つ。このことは様々な学年を経験するということにもなる。日本の典型的な社内研修に、同僚が直面する問題を理解するためにすべての部署を回るというのがある。様々な学年を教えることによって、各学年の問題や学習の前後関係を認識することができると日本の研究者は説明している。また、一般に日本では生徒と担任教師が一単位になっていてほとんどすべての教科と昼食の時間を共に過ごす。日本の教師は、クラスという共同体感覚を重視していて、昼食の時間や毎日のクラスミーティング・音楽・美術の時間などを共同体の感覚を築く大切な機会であると考えている。

理科と数学の国際的なテストで日本の子どもは常に大変高いランクにある。小学校低学年からアメリカの子どもより一般に優れており、その差は年齢と共に開く。しかし基本的な認知能力のテストでは差が出ないため、二者の差は遺伝子学上のものではないと思われる。また、熟通いをしている子どもがほとんどいない時点でも差は現れてい

るので、放課後の学習も関係していない。

日本の教育が「創造性」を育てるのかどうかということが指摘されているが、入念な研究はされていない。アメリカでは、学業達成とオリジナリティが結びついているが、日本では忍耐力が学業達成につながっているという指摘もある。しかし、あるテスト結果によると日本の子どもは基本的な技能よりも概念理解においてアメリカの子どもより非常に優れている。また日本の子どもの創造性をテストと教室での観察によって評価したポール・トランスは、アメリカの幼稚園教師が日本の幼稚園教師から学べき点はたくさんあると指摘している。他の西欧諸国の研究者も日本の小学生の読み、図工、音楽の達成度に感心している。日本の子どもの創造性は、数学や理科などの領域では花開き、他では衰えて行くのかも知れない。

また、日本の初等教育の欠点としては、協調することへの圧力、外国人や帰国子女を統合する際の失敗、国際的な感覚を育てることができないこと、などが国の内外から指摘されている。

初等教育から高等教育まで共通の特徴

国家統制

日本の学習指導要領では、技能に関してだけでなく感情や意欲に関連した目標も定められている。また、出版者が作った教科書を文部省が検定する。ある日本人研究者は、この検定制度は革新的な方法や論争の的になりそうな考えを閉め出すので効果的な検閲のシステムになっている、と主張している。

大規模なクラス

日本の学校のクラスの規模は徐々に小さくなっ

ているものの、アメリカの水準に比べると大きい。後の章で触れるように、日本の教授テクニックは大規模なクラスにうまく適合している。家族のような小さなグループがクラス活動の基本単位になっているため、大きなクラスでも円滑に機能することができる。

能力別のグループ編成や学級編成を避ける

能力別のグループ編成や学級編成がないにもかかわらず数学や理科の国際テストで高得点をとるということは、アメリカ人にとっては信じ難いことであるが、日本では義務教育の間は能力や達成度によって生徒に差をつけることを避けている。また、出席している限りほぼ自動的に進級でき、落第や飛び級はない。

教師の威信

日本では教師の社会的威信と給料が高い。給料の高さがこの職業を続けることへの経済的な動機となっている。アメリカの教師（小学校と中学校）の経験年数の平均は十三年であるのに対し、日本の教師の平均は十六・八年（小学校）と十七・五年（中学校）である。

教員組合の役割

アメリカ人がさらに驚くのは日本の教員組合、日教組の実質的役割である。日教組は過去四十年間にわたって日本の教育を形作るとともに、文部省と敵対し能力別学級編成や学力テストに反対してきた。

大学入学試験

日本の大学入試は「学校システム全体を動かす闇のエンジン」とも呼ばれている。大学入試の圧力は、就学前の子どもにさえかかっており、「エスカレーター」式の幼稚園に入れたがる親もいる。しかし、次章で触れるように幼稚園入試は非常に限られた現象で、おそらく幼稚園児の一パーセントにしか関係していない。

（お茶の水女子大学大学院）